

## あいづち研究：

ブラジル人日本語学習者へのあいづち指導の模索

## Conversation Signals:

Brazilian learners of Japanese

富永由美子 リオデジャネイロ連邦大学

Yumiko Tominaga The Rio de Janeiro Federal University



日本語教育研究、ブラジル、あいづち

JAPANESE LANGUAGE EDUCATION, BRAZIL, AIZUCHI,  
CONVERSATIONAL SIGNALS

### Abstract

The development of communication abilities has been the main concern of the teaching of foreign languages. In the case of the Japanese language, the approach of “Aizuchi — Conversation signals” is particularly interesting because it is related to a conversational signal system that has a very important function in communication interaction. “Aizuchi” functions comprise signals:

1. that indicate the other person is listening to the conversation,
2. of understanding of the given information,
3. of subject agreement,
4. that indicate doubt or disagreement by the listener

In this research, three teaching plans of 15 to 30 minutes of duration were developed to be applied to Japanese language students of the Rio de Janeiro Federal University (Universidade Federal do Rio de Janeiro — UFRJ) and the Rio de Janeiro Japanese Language School. The main assumptions of those plans are:

- Functions and types of “Aizuchi”,
- Basic timing of using “Aizuchi”,
- “Aizuchi” with listener assessment and without assessment;
- “So desu ka” intonation,
- Class activities to stimulate the output through role-play.

#### (I) はじめに

外国語教育としての日本語教育で重要なことは、異文化間におけるコミュニケーション能力の開発である。相手との相互作用のある対話形式では「あいづち」が非常に大きな関わりを持っている。個人的な話し合いの場面で、日本人を相手に日本語でコミュニケーションを行なおうとするとき、あいづちを打つことができないことは大きな支障になり、十分なコミュニケーションができないということになる。あるべきところにあいづちがないと、一生懸命話していても、全く反応がないので、ほんとうに聞いているのか不安になる。特に、電話での会話では聞いているのか、分かったのかを、話を中断して、「もしもし」と確認しなければならないのが普通である。これは「他の人が話しているときは、黙って聞くのが礼儀である」というブラジル文化の影響がでているからだと考える。ブラジルには”Quando um burro fala, o outro abaixa a orelha”（一頭のロバが話しているときは他のロバは耳を下げる）ということわざもある。日本語のあいづちはかなり特殊なものなので、このように、マイナスの意図を持つと考える環境にある学習者にとっては疑問に思われることが多いと思う。日本ではあいづちをうつだけではなく、相手の方を向いてうなずいたり、身を乗

り出したりという非言語的な面の学習も大切である。話し手と聞き手との関係（社会的地位、役割的關係、年齢差、親疎等）、場面（フォーマル、インフォーマルなど）、地域差、あいづち使用者の年齢、性別等の社会的要因等も考慮に入れなければならないことなど、「敬語行動」にも関連している面もあり、あいづちが日本語教育の場でも配慮され、学習者に認識させることは必要であると考え、研究の対象とした。

### (III) あいづちの実際

水谷信子(1983)の調査の結果によると、1分間あたりのあいづちの回数は普通、15～20回ぐらいだということである。「ええ」「はい」などがよく使われるが、同じ人が話の内容に応じて何種類かのあいづちを使いわけているようである。一番多くの種類を使う人は7分30秒の間に26種、少ない人は2分5秒間に4種という結果もでてくる。

あいづちは、ある程度まとまりのある句のあとで打たれるので、あいづちとあいづちとの間の音節数が、話しことばの句の長さになっている。だいたい20音節ぐらい話したときに、聞き手があいづちを打つというのが典型的な話の形になるようだ。

「きのうもその話をちらっとしましたが、…」

「この間、コンピューターを買いに行ったんですが、…」

「先週の上野先生のお授業なんですけど、…」

ぐらいの長さである。ちょうど一息に話せるぐらいの長さで、聞く方にとってもすんなり頭に入る長さである。すなわち、あいづちは文のコンマにあたるものと思えばいい。また、話し手が「ね」等の終助詞を使ったり、ポーズを置いたりして、聞き手があいづちを打ちやすいような話し方を自然にしているということもコミュニケーションの上では重要なことである。

### (III) あいづち調査の実態

学習者があいづちを打ってくれないとか打つあいづちに違和感があるということは常日頃感じてはいるが、それを実証するために、リオデジャネイロ連邦大学のブラジル人学習者とリオデジャネイロ日本語モデル校の日系人の学習者の20人を対象に次のような調査を試みた。

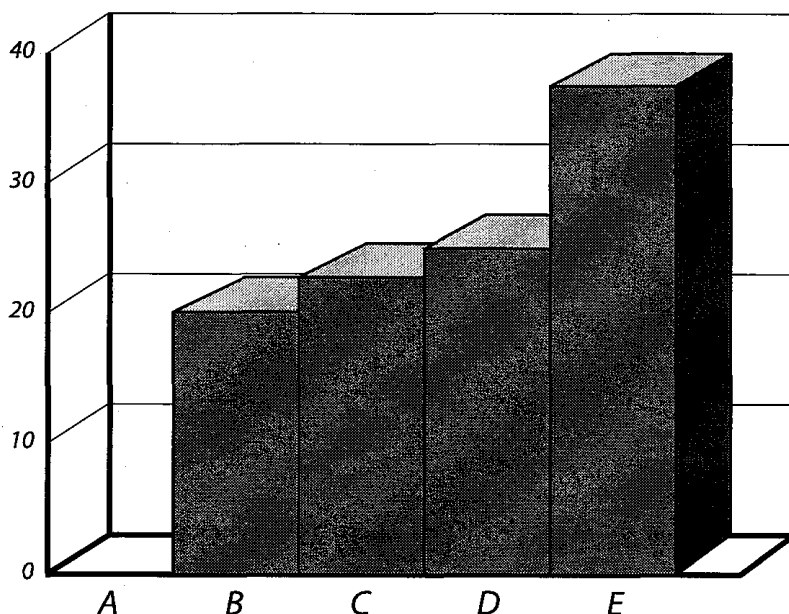
フリートーキングの方法で学習者二人ずつで15分ぐらい、自由に話し合ってもらったものをテープに録音し、それを書き起こし、学習者のあいづちの平均頻度の調査を試みるというものである。調査の対象人数が少数であるため、確実とは言えないが、予想していた通りの数字であったと考える。

表1 日本語学習者あいづちの頻度

日本語学習者	あいづち 頻度 (平均)	備考
A ブラジル人2名 (日本語学習歴2年半)	0%	
B ブラジル人4名 (日本語学習歴3年)	19.7%	
C ブラジル人2名 (日本語学習歴4年)	22.8%	「共話*」が多くなる
D 日系人6名 (日本語学習歴3年)	25.0%	「共話」が多くなる
E 日系人6名 (日本語学習歴4年)	37.5%	「共話」が多くなる

\*：水谷信子(1988)の造語で、あいづちを打ちながら、話の流れを助けると同時に、相手の言ったことを確認したり、言い直したりすること。

図1 日本語学習者あいづち頻度グラフ



この表や図を見ると、日本語学習歴が多くなるほど、あいづちの頻度も多少ふえてくることがわかる。日系人の方が頻度が多いのは、耳からの日本語習得が影響しているからであろうと考える。また、あいづちの頻度が増すとともに「共話」の頻度も増えていくということは、自然の会話を耳から習得しているということだろうか。

また、学習歴2年半の学生のフリートーキングでは、文法的には正しいが、長い文をポーズなく、一気に言ってしまうので、不自然な日本語になってしまうということがよくあった。あいづちを打ち、打たせながら話を進めていくことを教えられていないと、コミュニケーションに支障を来すことになるという事実も明白である。

特に、人にもものを頼む時は、相手のあいづちを待って、少しずつ話を進める方法が日本語では謙虚な態度であるとして、好まれるので、敬語行動の一つとしてのあいづちの指導も必要になってくる。

あのう、すみません。〈ハイ〉

ちょっとお願いがあるんですが、…〈ハイ〉

実は推薦状を出すようにと言われてまして…〈エエ〉

お忙しいところを申し訳ないとは思いますが…〈ハイ〉  
書いていただけないでしょうか…。〈ソウデスカ〉〈分かりました〉

のように区切って言うと、依頼される方も気持ちよく引き受けてくれることになるであろうが、殆どの学習者からの依頼の言葉は「推薦状が必要ですが先生は書きたいですか」と一気に言われてしまって、とまどうことも多い。

#### (IV) あいづち教案

そこで、あいづち指導のために、15分乃至30分程度の教案を作成し、週1回の割りで少しずつ、指導をしていくことを試みてみた。

#### 教案Ⅰ あいづちの導入とタイミング (30分)

到達目標：あいづちの機能と種類、及びタイミングを意識化させる。

#### 1 あいづちの機能と種類 (15分) (プリントの配布)

##### 1-1 言語行動におけるあいづちの機能

あいづちの機能にはつぎのようなものが考えられる。(松田陽子 1988)

- (1) 聞いているという信号
- (2) 話し手が伝えた情報を理解しているという信号
- (3) 同意しているという信号
- (4) 否定的な気持ちや疑いを示す
- (5) 興味や関心を示す
- (6) 話の間をもたせる

などがある。

## 1-2 あいづちの種類

あいづちに使用されることばとして頻度の高いものを挙げてみると次のようなものがある。

アー	イエイエ	ウン	エエ	ソウデスカ	ハイ	ホウ
アハハ	イヤイヤ	ウン、ウン	エエ、エエ	ソウデスネ	ハア	ホント
		ウーン	エ	ソウ	ハア、ハア	
		ウウン	ネエ	ナルホドネ	フーン	マサカ
		ヘエー	ナルホド	フンフン		

## 2 評価を含まないあいづちと評価を含むあいづちに注目 (10分)

素材 1：NHK ラジオ インタビュー番組「からすの話」1996年のテープを聞いてみる。2、3回聞いてから、プリントを配布して、内容を確認する。  
(評価を含まないあいづち)

で特に、あの〈ええ〉渋谷の街あたりですと、ま、明治神宮が〈ええ〉近いというのも〈ええ〉あるんでしょうけれども、その街中の、も、スナック街だとか〈ええ〉、いわゆる夜〈歓楽街ですね〉盛り場になってる〈ええ〉ところ〈ええ〉の、朝の〈ええ〉、じゃ〈ええ〉そのあたり〈ええ〉に、いますよね。からすが。〈ええ〉ごみがたくさん出て...

素材 2：NHK 生活ホットモーニング「緑茶パワーの秘密」1999年5月11日放映のビデオを視聴する。2、3回視聴してから、どんなあいづちが使用されているか、どんな評価を含んでいるかを学習者に書き上げさせてみてから、プリントで理解の程度を確認。

(評価を含むあいづち)

品種は同じなんです。〈ハア〉

育て方が違うんです。〈ヘエー〉

そんな手間をかけているんですか。

〈ソウ〉、本当に手間をかけていらっしゃいました。

あの、ほかにもあのわらをかけていらっしゃいましたよね。〈ハイハイ〉

あのわらにもひみつがあって、〈エエ〉

この時期、ちょっとのびているこの時期に、かけろっていうので、もうタイミングをのがさず、わらでおおいをすると、〈ハアー〉

そのわらにも意味がありまして、〈ハイ〉

雨が降ったりとか霧が出たとき、湿度をちょうどいいぐあいに含んで、〈ハアー〉

あの茶畑のあのおおわれた中にですね、ちょうどいい湿気がたまるんだそうです。〈ハアー〉

それがいい玉露を育てると、〈ハアー〉〈ヘエー〉

ほんと、目がはなせない作業だと思いましたね。〈ヘエー〉

### 3 あいづちのタイミングの練習 (5分)

ポーズのところで「ええ」を入れ、最後に小旗を挙げたら、「そうですね」を言う練習をおこなう。

P: 先月の山崎先生のお授業なんですけど、(ええ)

A: あれは確か読解問題の学習だったと思うんですけど、(ええ)

P: 皆さん、しっかり勉強したから、難しくなかったですね。(小旗)  
(そうですね)

ポーズのところで「ええ」を入れ、最後に小旗を挙げたら、「そうですか」を言う練習をおこなう。

P: この間コンピューターを買いにいったんですが、



A：ええ。

P：どれがいいのか分からなくて、

A：ええ。

P：結局、何も買いませんでした。(小旗)

A：そうですか。

## 教案 II

### 2-1 「そうですか」のイントネーションと評価 (30分)

到達目標：「そうですか」のイントネーションにより、種々の評価を伝えることを認識させる。(視聴覚教材フォーラム 3 1996年)

素材：ビデオ「日本語教育映像教材 中級編」(15分)

- (1) 「持ってきましたら、いつごろこちらで新しい膳本をいただけますか。  
「そうですね。翌日ですね。」「あっ、そうですか。はい、わかりました。」(評価を含まない)
- (2) 「私、あのう、結婚することになりました。」「ほう、そうですか。  
そりゃ、おめでとう。」(驚きを含む)
- (3) 「じゃ、すいません。せっかくだけど。」「そうですか。この家賃  
ならお得だと思うんですがねえ。」(反対意見を含む)
- (4) 「これと同じ物、ありません?」「それが、みなさんからお出し  
いただいたものですので、ほとんどが1点きりなんですよ。」「そ  
うですかあ。これ、とっても気に入ったんですよえ。」(残念さ  
を含む)

ビデオの各シーンを見ながら、「そうですか」を言っている人の気持ちを場面や態度で推測し、イントネーションの変化によって、含む評価の違いを確認する。また、ビデオを見たあと、同じ場面を同じようなイントネーションで「そうですか」をリピートさせてみる。

## 2-2 「そうですか」と「そうですね」の違い (15分)

到達目標：「そうですか」と「そうですね」は形態的に類似しているが、使い方がちがうことを認識させる。

素材：カセットテープ

「そうですか」は話し手が伝えた情報の了解を伝える場合で、軽い調子で使われる。それに対して「そうですね」は共感を伝える場合で、下降調で強く言われる。

(1) P：この間コンピューターを買いにいったんですが、

A：ええ。

P：どれがいいのか分からなくて、

A：ええ。

P：結局、何も買いませんでした。

A：そうですか。

(2) P：きのうテレビを見ていたら、

A：ええ。

P：動物の赤ちゃん特集をやっていたんですが、

A：ええ。

P：赤ちゃんはどの赤ちゃんでもかわいいものですね。

A：そうですね。

(3) P：この写真はビーチパークなんですが、

A：ええ。

P：プールやスーパーもあって、

A：ええ。

P：とってもきれいなところでした。

A：そうですか。

(4) P：ヤンさんと日本の人々のビデオなんですが、

A：ええ。

P：あれはストーリーがある映画ですから、

A：ええ。

P：見ていておもしろいですね。

A：そうですね。

### 教案Ⅲ アウトプットを促す活動例

到達目標：適切なタイミングであいづちが打てるようになる。状況に応じたあいづちを選択して使用できるようになる。

教材：ロールカード 時間：30分

教室活動：ロールプレイ

手順：

- ①学習者をペアにして、それぞれにロールカードAまたはBを渡す。
- ②学習者B（あいづちを打つ役）に次のような指示を与える。  
 『「そうですか」だけを使って言ってください。あなたの気持ちがAさんに分かるように、顔（表情）や声に気をつけてください。』  
 （言語だけでなく非言語行動にも注意させるため）
- ③学習者AとBはロールカードの指示に従い、会話をする。
- ④ペアでやったものを最後に皆の前で発表してもらう。
- ⑤ロールプレイ終了後、会話がうまく進行したかどうかを教師はAとBに質問して確認する。（フィードバック）

ロールカード例：Bさんから、Aさんに聞くことから始めます。

A：Bさんはあなたがダイエットをして、10kgやせた方法を聞いているので、教えてあげてください。「朝は牛乳を飲んで、果物を食べます。昼はたくさん、夜は少し食べます。晩ご飯は9時までに食べます。ぬるめのお風呂にゆっくり入ります。お風呂のあとは水は飲んでもいいですが、ジュースやビールは飲んではいけません。

B：最近とても太ったので、友達のAさんがダイエットをしてやせた方法を聞きます。

<p>A: 先日テレビが故障してしまいました。修理を頼むために電気やに電話をしましたが、なかなか来てくれません。10回も電話をして、ようやく来てくれましたが、修理代がとても高くなると言われて、結局、新しいテレビを買いました。</p>	<p>B: Aさんの家のテレビが故障してしまったようです。</p>
<p>A: あなたは今度結婚することになりました。相手の男性(女性)について話して下さい。相手とは宗教も同じだし、誠実で、ユーモアがあり、将来性もあることに魅力を感じました。それにとってもやさしいです。</p>	<p>B: あなたの友達のAさんはビッグニュースがあるというので、あなたに聞いてほしいようです。</p>

### (V) 今後の課題

100分授業の週1回あるいは週2回のクラスの中で、読解能力や漢字、会話にも重点をおきながら、敬語・外来語・ことわざを含む慣用表現やあいづちの指導もしていくということなので、十分な時間が持てないというのが現況である。今までは、教師が学習者と話す際のあいづちには気を配ってはいたが、特別にあいづちの指導はしていなかった。けれども、学習者があいづちをうってくれなかったり、学習者のあいづちに違和感があったりするため、常に話しにくいと感じていたし、また、学習者自身が日本人のあいづちに対する疑問を持っていたりするので、コミュニケーション能力の養成という教育目標から、あいづちを一つの学習項目として取り上げる必要性を痛感した。しかし、あいづちだけを授業とするカリキュラムは無理なので、毎回のクラスに15分乃至30分の練習を組み込んだカリキュラムの中での指導を試みた。現在の学習段階は、「日本語のコミュニケーションにおけるあいづちの必要性に気づき、使う努力をし始めた」とい

う程度ではあるが、コミュニケーション能力を養うためのひとつの方法として、教案作成は有効だったと思われる。相手があいづちをうちやすいようなイントネーション・強さ・長さ・高さ・タイミング・ポーズ・非言語行動などの、あいづちとしての重要な要素の指導や、ネイティブスピーカーの協力を得て、テーマを決めた話し合いの場をつくること、また、フィードバックの仕方、評価の方法など今後の課題として残されていることはまだまだ多いが、これからも研究を重ね、指導方法を明確にしていきたいと考えている。

### 参考文献

- 岡崎志津子・小西正子・藤野篤子・松井治子・松永雅子(1990)「ロールプレイで学ぶ会話(1)こんなとき何と言いますか」凡人社  
「視聴覚教材フォーラム3(1996年)記録」p. 72-88. 国立国語研究所日本語教育教材開発室
- 文化外国語専門学校(1996)「楽しく読もう」I 凡人社
- 松田陽子(1988)「対話の日本語教育学—あいづちに関して—」(『日本語学』12月号 p. 59-65) 明治書院
- 水谷信子(1983)「あいづちと応答」(『講座日本語の表現三 話し言葉の表現』) 筑摩書房
- 水谷信子(1988)「あいづち論」(『日本語学』12月号 p. 4-11) 明治書院